

『ベオウルフ』「フィン王の挿話」における Hengest について

岩谷 道夫

1

古期英語詩 *Beowulf* 『ベオウルフ』には、本編の物語の中に、いくつかの挿話が織り込まれている。その中に、通例 The Finn Episode 「フィン王の挿話」と呼ばれる挿話がある (*Beowulf* ll.1071-1159)。フィンとは Fresan フレーザンという国の国王であり、フレーザンとはフリースランデ、北海沿岸に存在していた中世のゲルマン人部族国家の一つである。その「フィン王の挿話」は、デネすなわちデンマークの国王の王族フネフが、その妹のヒルデブルフの嫁いだフレーザンの国王フィンの城館に宿泊中に、フレーザンに属していたジュートの兵士により襲撃され、非業の死を遂げる事件を取り扱っている。その事件の後、デネの軍の統率者としてフレーザン、ジュートの兵士達と戦い、雪辱し、主君フネフの無念を晴らした人物が Hengest である。Hengest は、アルフレッド大王の頃の古期英語の発音ではヘンジェストであった。

ところで、アングロ・サクソン七王国の中で、7～8世紀に隆盛を極めたノーサンブリア王国のベダは、ラテン語でイングランドにおける最初の歴史書『英国民教会史』を著わしている。その中で、ベダは、最初にブリテン島に移住したゲルマン人部族として、アングル、サクソン、ジュートを挙げ、そのジュートを率いていた人物として、Hengist ヘンギストと Horsa ホルサの兄弟に言及している (Beda I – XV)。そのベダに言及されている Hengist は、ジュートの出身であった。そのベダの『英国民教会史』を古期英語に直したアルフレッド大王の翻訳では、Hengist は、Hengest となっている。

『ベオウルフ』の「フィン王の挿話」における Hengest は、デネ、つまりデーンの側の軍事的統率者でジュートと戦い、一方、ベダの『英国民教会史』の Hengist は、後のアングロ・サクソン人となるゲルマン民族の一部族、ジュートの長であった。その両者の名前は、古期英語ではいずれも Hengest で、同じ名前であるが、正反対の立場であるので、2人の Hengest を別人とする観

6 岩谷道夫

方が一般的だった。しかしその名前の一致を単なる偶然とは見なさず、同一人物とする見解も存在する。例えば、20 世紀のアングロ・サクソン史の碩学チャドウィック等の見解である。

本稿は、『ベオウルフ』の「フィン王の挿話」における Hengest と、ベーダの『英国民教会史』における Hengist を同一人物と考える、その見解を検討する。もし同一人物であるとするならば、ベーダの『英国民教会史』ではジュートである Hengist が、『ベオウルフ』の「フィン王の挿話」では、なぜデネの將軍 Hengest になっているのであろうか。2 人の Hengest が同一人物であるということが成立し得るとすれば、それはどのような状況においてであらうか。その問題を考えることにしたい。なお、本稿では、ベーダの Hengist を、アルフレッド大王の古期英語訳の Hengest のつづりで考えることにする。同じつづりの Hengest の方が、その人物に対して、照準をより鮮明にすることができるように思われるからである。

2

まず、『ベオウルフ』の「フィン王の挿話」に登場する Hengest について考えることにする。その前に、『ベオウルフ』の中で、「フィン王の挿話」は、どのような局面で語られるのか、「フィン王の挿話」に至る物語を振り返ってみたい。

主人公ベオウルフは、デネの国王フロースガールの要請に応じて、デネの王宮に対する怪獣グレンデルの暴虐を抑えるために、故国 Geatas イェアタスから船に乗り、デネに来る。ベオウルフは襲ってきたグレンデルを倒し、グレンデルは瀕死の状態で棲家の沼に帰っていく。国王主催の、ベオウルフの英雄的行為を称える祝宴が開かれ、国王フロースガールによってベオウルフに賛辞が賜われ、饗宴が佳境に入った時に、宮廷の詩人により歌われる物語が、「フィン王の挿話」なのである。

「フィン王の挿話」は、ヒルデブルフにふりかかった悲運が最初に述べられる。ある戦があり、その戦の内容について「フィン王の挿話」では詳しくは語られていないが、その戦でヒルデブルフは、彼女の兄と彼女の息子を失った。ヒルデブルフは、フレーザンの国王フィンに嫁いだデネの王女であったが、その戦で、デネの王族である兄フネフと、夫フィン王との間の息子を失ったのである。フネフは、妹の嫁ぎ先のフレーザンの国王フィンの城館を訪れ、

その時に、フレーザンの側にいたエーオタン（ジュート）による不意の急襲に遭う。デネとフレーザンの間に激しい戦が繰り広げられ、結局、デネのフネフは殺される。「フィン王の挿話」は、その戦の終わった直後の状況から始まり、その戦が具体的にどのようなものであったかについては書かれていない。戦の内容は、『ベオウルフ』とは直接関連のない古期英語詩『フィンズブルフの戦』に触れられている。『フィンズブルフの戦』は、写本の大部分が失われ、今日伝えられているのは45行ほどであるが、もともと数百行はあったものと推測されている¹⁾。『ベオウルフ』の「フィン王の挿話」で、その最初の戦についての説明が省かれているのは、おそらく『ベオウルフ』の著者の時代には、その『フィンズブルフの戦』の詩が、広範に流布していたためと思われる。その『フィンズブルフの戦』を暗黙の前提として、『ベオウルフ』の著者が宮廷詩人に語らせ始めるのが、「フィン王の挿話」なのである。

「フィン王の挿話」の冒頭は、「ヒルデブルフはエーオタンの信義を称賛する理由はなかった。何の罪もないヒルデブルフは、その戦で兄と子供を失った。」という表現で始まる。つまり、ヒルデブルフに対してエーオタンが信義にもとる行動をとった、その結果、戦でヒルデブルフは、兄と息子を失うという悲劇に遭った、という内容である。エーオタンというのは、前述のように、アングル、サクソンとともにブリテン島に渡ったジュートのことである²⁾。つまり冒頭で、デネの王女ヒルデブルフは、ジュートを信じたために悲惨な運命に遭った、と述べられているのである。そして、その戦で死んだ主君フネフの仇をとるために、デネに属する武将 Hengest は、フレーザンの国王フィンとその家臣のフレーザン、そしてフレーザンに属するジュートと戦う、そしてフィンを討ち、戦に勝利し、ヒルデブルフをデネに連れ戻す。それが、「フィン王の挿話」で述べられるデネとフレーザンの間の第二の戦である。Hengest は、「フィン王の挿話」では詳しく描写されていない第一の戦においても登場し、『フィンズブルフの戦』にも言及されている。その第一の戦で、Hengest はデネの側を代表して戦い、フレーザンの軍勢に多大な打撃を与えた。しかしながら Hengest の主君、デネのフネフは斃れる。フレーザン側も、フネフを倒したとは言え多くの戦死者があり、フィン王はデネに和睦を提案し、デネもそれに応じ、和平の条約が締結される。Hengest は、引き続き家臣達とフィン王の城館にとどまることになる。とどまっていたその数カ月の間に、鬱勃と湧きあがる仇討ちの念を抑え難くなり、遂に実行し

主君の無念を晴らすのである。

ここで確認したいと思うのが、「フィン王の挿話」におけるエーオタンすなわちジュートの役割、そしてジュートと Hengest の関係である。前述のように、エーオタンのデネに対する背信行為により、フィンズブルフにおける戦と、それによる悲劇が生じた。実際に、エーオタンのデネに対する背信行為がどのようなものであったか、その内容については、「フィン王の挿話」では明らかにされていない。もともとデネとフレーザンの関係は脆いもので、いつでも崩壊するようなものであったとする見解もある³⁾。いずれにせよ、エーオタンすなわちジュート（エーオタンは『フィン王の挿話』の中でフレーザンと同じ意味で用いられている場合もあるが）の背信により、デネに悲劇が起こり、それに対し、その状況を逆転させてデネに最終的勝利をもたらしたのが、デネの軍隊を統括していた Hengest であり、そして Hengest の仇討ちの矛先が向けられていたのが、フレーザンと、エーオタンすなわちジュートであった。

ところで、そのジュートを仇敵としていたそのデネの Hengest が、後にブリテン島に渡り、定住したゲルマン人のジュートの代表者 Hengest であったとするのが、チャドウィック等の見解であった。ジュートを敵とするデネの Hengest が、ジュートとしてブリテン島に渡るということが、あり得るのであろうか。次に、諸研究者の見解をみることにしたい。

3

20 世紀を代表するアングロ・サクソン史の研究者であったチャドウィックは、2 人の Hengest について、次のように述べている (Chadwick 52-53)。もともと Hengest という名前はきわめてまれな名前である；その名前の人物は、ベーダの Hengest の他に、『ベーオウルフ』と、フィンズブルフの戦の詩に見出されるのみである；Hengest は、デネの国王ヘアルフデネ Healfdene⁴⁾ に連なる王族と思われるフネフ Hnæf の配下の将軍であった；フネフが何らかの理由でフリースランドを訪れ、その時に国王フィンの家臣達によって殺害される；Hengest と他の戦士達は、長い戦の末、フィンと和睦を結んだ；しかし彼らの中にはデンマークに帰る者もいて、戦力を整え、最終的にフィンを倒した；しかし、Hengest がどのような運命をたどったかは述べられていない。

チャドウィックは、続けて次のように述べる。2 人の Hengest は、おそらく同時代人に違いない；『ベーオウルフ』の詩の舞台は、6 世紀の最初の四半世紀で、フロースガールの父ヘアルフデネは、5 世紀の半ば頃、デネを統治していたと考えられる；また二人の Hengest は同じ国の出身のように思われる；ネンニウスの *Historia Brittonum* では、Hengest は Oghgul、すなわち南ユトランドの Angel の出身であるとされ、『ベーオウルフ』と『フィンズブルフの戦』では、デネの出身になっている；2 人の Hengest が属していたゲルマン人部族については、ケント王国の Hengest は、ベータによれば Iutae (Iuti) であり、英語訳では Ytena、Eota、Iutna (Gen.pl.)、Iotum (Dat.pl.) である；もう一方の Hengest の属する部族は、『ベーオウルフ』によれば Eotena (Gen.pl.)、Eotenum (Dat.pl.) となっている；それらは著しい類似性がある；またネンニウスでは、Hengest は亡命者であったとされている；もう一方の Hengest の運命についてはわからないが、その主君を殺害した相手と和睦した後では、Hengest は故国には到底帰れなかったであろう；そのような場合は、亡命するのが通例である；結局、Hengest のケント地域への侵入が 440 年以後の事であるならば、2 人の Hengest が同一人物であることは、ほぼ間違いない。

以上、少し長くなったが、チャドウィックの説は極めて重要なものを含んでいるので、Hengest に関する説の中心部分を略述した。

まず、チャドウィックの見解で興味深いのは、「フィン王の挿話」の Hengest を Eotan エーオタンすなわちジュートと考えている点である。上の「もう一方の Hengest の属する部族は、『ベーオウルフ』では Eotena (Gen.pl.)、Eotenum (Dat.pl.) となっている」という部分である。しかしながら実際には、『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」の中で、Hengest が Eotan エーオタンに属していると述べられている箇所は一箇所もない。チャドウィックは、なぜ Hengest をエーオタンすなわちジュートに属すると考えたのであろうか。チャドウィックは、その理由について明言していない。

またチャドウィックは、その後の Hengest の運命について「フィン王の挿話」では述べられていないとしている。確かに、和睦した後の Hengest が引き続きフィン王の館で過ごしたという部分では、Hengest が文章の主語で用いられているが、その後は固有名詞としての Hengest は、文章の主語としては現われない。それで、チャドウィックは、Hengest が、デネによるフィン王に対する第二の戦に参画しなかったと考えるのであろう。しかしながら、

フィンズブルフにおける戦の後、和睦によりフィン王の城館にとどまった Hengest についての描写があり、季節の移ろいと自然の描写があり、その後に、主語として wrecca (=exile) を主語とする文章があり、そしてその次に、その wrecca を受けて he が用いられる文章が続き、その人物は、フィン王の城館でエーオタンに対する敵愾心を捨て難くなったというふう述べている (*Beowulf* ll.1127-1141)。その場合、その wrecca そして he が、固有名詞を与えられていなくとも、Hengest を表わすことは明らかであろう。チャドウィックは、wrecca という言葉に言及していないが、ネンニウスをもとに、Hengest を exile であるとしている。⁵ チャドウィックは、Hengest がフィンと和睦した後、フネフの仇を討たずに、ブリテン島に向かったと考えるのであろう。チャドウィックは、「フィン王の挿話」の後半では Hengest について触れられていないので、Hengest が主君の仇をとったか否か不明であるが、主君を殺された段階でデネに帰ることはできず、亡命を選択したのであろうと述べる。しかしながら、「フィン王の挿話」の後半は、wrecca 亡命者を主語とした描写が続くので、wrecca が Hengest であるならば、Hengest がフィンを討ち、主君の仇をとったことは確かであろう。ただ、たとえ主君の仇を討ったとしても、主君を守り切れなかった将軍は、その責めを免れないであろう。そのような意味から、Hengest は、チャドウィックの言うように、デネではなく、新天地のブリテン島を目指したということは、考えられ得る。

ところで、『ベーオウルフ』について、最も包括的な研究書を著わし、『ベーオウルフ』の代表的な研究者であったチェインバーズは、『ベーオウルフ』のエーオタンについての見解を、二つに分けて紹介している (Chambers 249-250)。一つは、エーオタンを Hnæf's Danes、すなわちフネフの下デネに属していたと考える見解である。チェインバーズは、その見解を、『フィンズブルフの戦』がフネフによるフレーザンに対する侵略であるとする見解であるとみなしている。チェインバーズは、エーオタンを、フネフのデネに属するとする見解は誤りであるが、重要な学者達に支持されていると述べ、その一人としてチャドウィックを挙げている (Chambers 249, fn 3)。チェインバーズは、次に、エーオタンについての、より一般的に受け入れられている見解として、エーオタンがフレーザンのフィンの家臣で、フネフの敵とする見方を挙げる。そしてその見解をチェインバーズが指示する理由を詳述する (Chambers 249-254)。チェインバーズの、問題点を一つ一つ検討してゆく方法は誠実で、論旨も明快であり、最終的に、エーオタンはフネフおよび

Hengest の側ではなく、フネフと Hengest の敵であるという結論も妥当なものであると考えられる。しかしながら、あくまでそれは「フィン王の挿話」の文章による限りにおいてであり、後に触れるように、別の観点から見れば、また異なる結論もあり得ると思われる。

ところで、チェインバーズの述べるように、チャドウィックは、確かに、エーオタンをフネフのデネに属すると考えているが、しかしながら、チャドウィックは、フィンズブルフにおける戦を、フネフによるフレーザンに対する侵略と考えていたわけではない。むしろその逆である (Chadwick 53)。つまりチャドウィックは、何らかの目的でフネフはフィンの城館を訪れ、その時にフレーザンに殺されたと述べているので、フネフが侵略しようとして逆に殺されたとは考えていない。従って、エーオタンをフネフのデネに属するとする第一の見解が、必ずしもフネフを侵略者とする考え方であるというわけではない。

「フィン王の挿話」では、フレーザンとエーオタンが極めて近い存在で、また背信者がエーオタンと明言されている。チャドウィックは、フネフのデネにエーオタンが属していたと断じているが、チャドウィックの言うような状況が成立するのは、おそらく、フレーザンの側のエーオタンとは別に、デネのフネフの側にも、エーオタンの別の一派が属していた場合であろう。そのような可能性に言及しているのが、ギルヴァン、トールキン、そしてレンである。レンは、チェインバーズの *Beowulf* の第 3 版を編集し、そこにチェインバーズ以降の研究について、補遺として一章を立て、その中でギルヴァンの説を紹介し、また自らそのギルヴァンの説を補強、展開している (6)。レンは次のように述べる。すなわち、ギルヴァンは、フネフの死により Hengest が統率者になったヘアルフデネがエーオタンすなわちジュートであるとする古い見解を支持している；その見解に基づくならば『ベオウルフ』の Hengest は、ケント（地域）を征服した歴史上の Hengest であると考えられることを可能にする；また、Hengest は、亡命者で、かつ傭兵隊長であった；それは、1.1137 の *wrecca* が示している；（中略）ジュートには、二つの集団があった可能性がある、一つは、1.1069 に見られるようにヘアルフデネに属するジュート、そして 1.1090 に見られるようにデネに属するジュートである、そしてもう一つは、フリージアンを支配していたフィンの下にあったジュートである (Chambers 544)。以上のレンの見解は、おそらくチャドウィックが、説明は試みずに確言していた事柄の実体と言えるだろう。

ところで、レンの前にトールキンの説が提示されていた。トールキンの説とレンの説は必ずしも重なるわけではないが、共通する面もあり、レンはトールキンに影響を与えられていると思われる。しかしながらレンは、トールキンについて、*Beowulf: The Monsters and the Critics* については最高の賛辞とともに言及しているが (Chambers 606)、トールキンの *Hengest* についての見解に触れていない。トールキンの見解は、次のようなものであった。すなわち、ジュートには、二つあり、一つはユトランドにデネが侵入した時に、デネと融和し、デネの下にあってデネを支えていた一派であり、その長が *Hengest* であった；一方、デネが侵入した時、デネとの融和を潔しとせず、ユトランドを逃れてフリースランの国家に移住し、フリースランを支えていた一派である；その二つのジュートが、フィン王の城館で会い、とりわけ後者が前者に対する恨みを抱いていたので、最初の戦が起こった；しかしながら、暫定的平和の後、再び新たなデネがフリースランにきた時、*Hengest* は、フネフの無念を晴らすのではなく、彼に従うジュート、さらにはフリースラン、そしてデネを連れて、新天地ブリテン島のケントに向かった (Tolkien 100-101, 124-130, 159-162)。トールキンの、*Hengest* がジュートであるとする根拠は、「フィン王の挿話」の *Eotena bearn* という表現であり、その箇所を *Hengest* がジュートである根拠としているのは、トールキンだけである。その表現の解釈については別に論じたいと思うが、トールキンが結論的にチャドウィックと近い考え方になっているのが興味深い。いずれにせよ、トールキンおよびレンによる、*Hengest* がジュートであるという可能性の指摘は極めて重要なものがあり、本稿の結語部分で、再びそれについて触れることになるであろう。

ここで、『ベーオウルフ』の刊本で極めて優れた編纂を行ったクレーバーの見解に触れることにしたい。クレーバーは、次のように述べている。すなわち、「フィン王の挿話」の物語は、一般的に北海沿岸の *Ingvaeones* (インガエオネース 7) の国々の間で最初に創られ、フリースランド、高地ドイツ、そしてアングロ・サクソンの新天地まで、広く伝えられたと考えられている；そうであるならばアングロ・サクソンに伝えられている「フィン王の挿話」は、極端な *Danification* がなされているので、数次にわたる改変の変遷があったに違いない (Klaeber 235)、と。クレーバーは、チャドウィックをはじめとする何人かの研究者が、「フィン王の挿話」とベーダのそれぞれの *Hengest* を同一人物としていることに言及し、もし同一人物であったならば、ベーダ

に登場するジュートの Hengest は、「フィン王の挿話」の中では、確実にフリージアンとともに行動したであろう、と述べている。つまり、ベータに登場するジュートの Hengest が、「フィン王の挿話」では、デネ側を代表してフレイザン（フリージアン）およびエーオタン（ジュート）と戦っているのは不自然であるという、極めて妥当な指摘である。

しかしながらクレバーは、その一方で、可能性として、二つの時期のジュートについての伝承が、アングロ・サクソン人の「フィン王の挿話」に反映されているのではないかと問いかけている (Klaeber 235 fn.)。すなわち、ユトランドに居住していた時のジュートは、デネと近い存在であり、それゆえ「フィン王の挿話」におけるデネの武将としての Hengest という存在が考えられ、一方で、フリージアンの近くに居住していた時のジュートは、フリージアンとの強い結びつきを示し、それ故、「フィン王の挿話」で、エーオタンすなわちジュートが、フリージアンと同じ意味で用いられている、と。

クレバーが述べるように、ジュートは、確かに二つの異なる居住時期の段階があった。まずジュートはユトランドにいて、その結果その名を半島の名前に残している。その次の段階で、ジュートはフリージアンの近くに居住していた。それは、古期英語の最古の詩『ウィードシース』からも窺うことができる (Widsith ll.26-27)。そのフリージアンの近くに居住していたジュートが、フリージアンと一緒に、あるいはフランクと一緒に、ブリテン島に渡り、アングロ・サクソン七王国の最初に隆盛したケント王国を造ったのである。

クレバーは、二つの段階のジュートが「フィン王の挿話」に反映されている部分について、次の箇所を挙げる。一つは、ユトランドに居住していた頃のジュートで、Hengest がデネの将軍として登場している箇所、もう一つは、フリージアンの近くに居住していた頃のジュートで、デネと敵対している箇所である。つまりクレバーは確言してはいないが、Hengest はジュートであると考えていて、Hengest の立場からは、一見矛盾するようなデネとフリージアンの関係も、二つの時期のジュートの伝承が混在しているのであれば、理解できないことはないとするのであろう。つまりクレバーは、チャドウィックの見解にある程度の賛意を示しているのである。

確かにジュートは、第二の段階については、前述のように、『ウィードシース』から、ジュートとフリージアンの近しい関係は窺うことができる。しかしながら第一の段階で、ジュートがデネと近しい存在であったという記録はなく、むしろ逆に、ジュートは、後方のデネによって押されるようにして、

フリージアンの地域に移住したと思われる。ただ、文献がないだけで、クレバーの言うように、一時期ジュートとデネの親近的關係も存在した可能性もあるのかも知れない。従って、「フィン王の挿話」で、**Hengest** がジュートであるにもかかわらずデネと親しい関係になっているのは、クレバーの言うように、初期の歴史の反映とも考えられる。ただ、問題は、「フィン王の挿話」において、**Hengest** がジュートであったとしたならば、なぜジュートとして述べられていないか、である。ジュートがデネと親しい関係であったのであれば、**Hengest** はデネに属するジュートと記されても良いはずである。ジュートと記されていない理由は何であろうか。クレバーは、アングロ・サクソンにおいて「フィン王の挿話」の物語に **Danification** で特徴づけられる徹底的な改変がなされたとしている。クレバーの言う **Danification** は、まさに『ベオウルフ』の「フィン王の挿話」の特徴と言えるものであろう。クレバーは、**Danification** という言葉を、どのような範囲にまで用いているのかわからないが、ジュートの **Hengest** がデネの武将となっていることも、含意されていると考えても誤りではないであろう。それではなぜ、イングランドの「フィン王の挿話」において、そのような **Danification** が行われたのであろうか。つまり、なぜ、ジュートと思われる **Hengest** が、デネの武将になっているのであろうか。

4

『ベオウルフ』は、デネについては、称賛の記述で連ねられているという見解が支配的であった。それに対し、『ベオウルフ』では、デネに対して二律背反的表現が見出されていると指摘したのは、ナイルズである (Niles 107-117)。つまり『ベオウルフ』は、デネの輝かしい時代に対する称賛とデネの現在の窮状についての記述が交互になされているとするのである。確かに、『ベオウルフ』において、デネは必ずしも称賛のみがなされているのではない。デネの王宮を襲う怪獣グレンデルの暴虐に対し、友邦国イェーアタスのベオウルフに、局面の打開を懇請する以外になすすべがなかったのは、デネの窮状そのものである。しかしながら、デネの窮状のみが述べられているのでもない。『ベオウルフ』の冒頭に見出されるように、デネの王朝はアングロ・サクソン諸王国の王統とも関係し、その国王の葬送は、この上なく荘重なものとして記述されているからである。

それでは、「フィン王の挿話」に、ナイルズの言う二律背反的観点は見出されるであろうか。見出されるとしたら、二つのうちどちらの観点であり、また、どの部分にそれが見出されるであろうか。実は、「フィン王の挿話」の Hengest が、そこに関係して来るのである。まず、ナイルズの Hengest についての言及を見ることにしたい。

ナイルズは、『ベオウルフ』のデネに対する二律背反的観点を指摘した後、Hengest に言及している。ナイルズは、その二人の Hengest が同一人物である可能性を示唆し、次のように述べている。すなわち、もし「フィン王の挿話」の Hengest が、449 年にジュートを率いてブリテン島に渡った Hengest と同一人物であるなら、Hengest は、すでにデネの統率者になっているわけであり、「フィン王の挿話」で Hengest が特筆されているのも理解できる；その場合、イングランド人とデーン人は、Hengest を共通の祖先として称賛することができるからである (Niles 285-286, Note52.)、と。

ナイルズは、ベーダの Hengest を、ジュートを率いてブリテン島に渡った人物としているが、Hengest 自身がジュートであったか否かには触れていない。また、「フィン王の挿話」で、Hengest はデネの統率者になっていると述べているが、Hengest の出自がデネであるか否かについては言及していない。しかしながら、アングロ・サクソンの起源の議論において、ベーダの Hengest がジュートであるという記述は、諸々の議論の前提と考えられ、その部分を否定すると、諸々の議論自体が成立しなくなる。従ってナイルズも、ベーダの Hengest を、おそらくジュートと考えているのであろう。また、ナイルズは、Hengest を「フィン王の挿話」では、デネの統率者となっていると述べているが、その場合、Hengest はジュートで、かつデネに属していると考えるのであろう。ナイルズの説を敷衍すると、Hengest はジュートであったがデネに属し、デネの統率者であった、そしてその Hengest がジュートを率いてブリテン島に初めて渡った、ということになるであろう。

「フィン王の挿話」では、ジュートは、戦の原因を作った背信者達として述べられている。そのジュートは、あくまでフレーザンの側のジュートであった。「フィン王の挿話」には、フネフのデネ側にもジュートが属していたとは全く述べられていない。しかしながら、チャドウィック、クレーバー、トールキン、ギルヴァン、レン、そしてナイルズは、いずれも、Hengest を含め、デネの側にもジュートが属していたと考える見解であった。しかしながら、Hengest を含め、デネの側にジュートが属していたにもかかわらず、

なぜ「フィン王の挿話」にその旨が明記されていないか、トールキンを除き、その理由については、述べられていない。明記されていない理由とは何であろうか。

それは、まずその物語の前提からすれば、そのようにならざるを得ない、ということがあるであろう。その物語の前提が、「ヒルデブルフが、エーオタン(ジュート)の背信により悲劇に遭った」とされているのであれば、ジュートは悪の側でなければならず、従って、あらかじめ正義の側のデネの英雄とされている **Hengest** は、ジュートであるということを明らかにされてはならないことになるであろう。**Hengest**、そして **Hengest** の他にもデネに属するジュートがいたとすれば、やはりその事は触れないであろう。正義の側の **Hengest** がジュートであれば、「フィン王の挿話」の冒頭の「ひとえにエーオタン(ジュート)の背信によりヒルデブルフに悲劇がふりかかった」という内容の部分が、意味をなさなくなるからである。アングロ・サクソン人であった『ベーオウルフ』の作者は、エーオタンすなわちジュートの背信行為を強調して「フィン王の挿話」を組み立てた。しかしながら、それではなぜ「フィン王の挿話」において、**Hengest** はあくまでデネとされ、ジュートであるという点は明記されず、ジュートは悪の側、フレーザンの側のみに属する存在にされたのであろうか。つまり、なぜ、「フィン王の挿話」で、ジュートは悪で、デネは善というふうに、アングロ・サクソン人である『ベーオウルフ』の作者は、設定したのであろうか。それは、イングランドの側からの、デネに対する賛意の表われとも考えられ、ナイルズの言う二律背反の観点の、おそらく最大級の賛意であり、またそれは、クレーバーの言う **Danification** でもあろう。その **Danification** をもたらすことになった理由について、次の結語部分であらためて考えることにしたい。

5

これまで、『ベーオウルフ』「フィン王の挿話」とベエダの2人の **Hengest** について、それが同一人物であるか否か、また同一人物であるとすれば、なぜベエダではジュートとなっている **Hengest** が、「フィン王の挿話」ではデネになっているのかについて、様々な研究者の見解を検討しながら考えてきた。

チャドウィックは、「フィン王の挿話」における **Hengest** がジュートであ

ることを自明の事としていた。しかしながら、チェインバーズの述べるように、「フィン王の挿話」のみによっては、Hengest がジュートであるという事は明らかにはならない。「フィン王の挿話」における Hengest をジュートと考え、その前提で推論を展開したのが、トールキンそしてレンであった。トールキンとレンに共通しているのは、フレーザンの側にも、デネの側にもジュートがいたということである。チャドウィックの述べるように、「フィン王の挿話」の Hengest がジュートであるならば、Hengest がデネの武将としてのみ記述され、ジュートとして明言されていない理由は何であろうか。それが、クレーバーの言う、イングランドにおける Danification を生ぜしめたものであろう。Ingvaeones の諸国で作られ、流布していた「フィン王」に関する物語は、イングランドで、数次の改変がなされ、その時に Hengest が敢えてジュートと明言されない記述になったのであろう。そこには、イングランドで Hengest をジュートと明言せず、デネとしての Hengest を強調する必要性があったと考えられるのである。

なぜイングランドにおいて、Hengest をジュートではなく、デネとして強調する必要があったのか、それは、「フィン王の挿話」の中で、Hengest は称えられなければならない存在であるからである。つまり、怪獣グレンデルを倒したベオウルフの祝宴で、無力のデネが強調されすぎないように、デネの英雄が称えられなければならなかったのである。デネの英雄を称え、その英雄とともにベオウルフの英雄的行為を称えるのが「フィン王の挿話」の目的だからである。Hengest は、困難の中でデネを救った。デネの英雄を称え、その英雄的行為をベオウルフと重ね合わせるのが「フィン王の挿話」の趣旨であり、そのためには、Hengest はエーオタンすなわちジュートではなく、デネでなければならなかったのである。

8 世紀、イングランドにデーン人が侵入し、9 世紀後半、ロンドンとチェスターを結ぶ線の北の広大な領域がデーンロー地域になった。あくまで統治の側はアングロ・サクソン人であったが、中部から北部のデーン人も、イングランドを構成する重要な構成民族になった。そのために何よりも必要とされたのが、アングロ・サクソン人とデーン人の融和であった。作成された経緯は不明であるが、作品としての『ベオウルフ』、とりわけその前半は、ナイルズの言うように、デーン人を称える一方で、デーン人が困難を通じて、つまりベオウルフの手を借りて、かろうじて国家を維持していることが描かれている。それは『ベオウルフ』の作者が、『ベオウルフ』を通して、

アングロ・サクソンとデネの一体化、共存共栄を目指そうとした表われと考えられる。デネの窮状は、イェータスの英雄ベーオウルフによって助けられなければならない、またそのことで失われたデネの名誉は、「フィン王の挿話」のデネの英雄 Hengest によって回復されなければならない。それゆえ、「フィン王の挿話」の Hengest について、そのデネに属する点を強調して、英雄行為を称えたのであらうと思われる。

以上、「フィン王の挿話」では Hengest はジュートであったとは述べられていないが、「フィン王の挿話」の物語におけるジュートの悪の強調、『ベーオウルフ』の中のデネに対する二律背反的観点、もともとの「フィン王の物語」に Danification はなかった点、等を考え併せると、Hengest がジュートであったという帰結は、不自然なものではないと思われる。従って『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」および『フィンズブルフの戦』の中に登場するデネの英雄 Hengest が、ベーダの記述の中のブリテン島に最初に移住したジュートの代表の Hengest と同一人物であった可能性は、十分にあると言えるであろう。なお、本稿では、「フィン王の挿話」において Hengest をジュートとする記述は見出されないという立場に立って論じた。唯一、Hengest をジュートとする記述が「フィン王の挿話」に見出されとしたトールキンの見解については、稿を改めて論じたい。

註

¹ クレーバーは、もし原詩が残っていれば、300 行くらいの詩の可能性があると述べている (Klaeber, p.236)。

² 拙稿『『ベーオウルフ』フィン王の挿話におけるエーオタン』、『異文化の諸相』、第 25 号、日本英語文化学会、2004 年、を参照。

³ 厨川文夫、『厨川文夫著作集、上』、金星堂、493 頁参照。

⁴ ヘアルフデネとはデネの国王で、『ベーオウルフ』の中で何度も言及されているが、デネの国王フローガールの父親である。一方、デネと同族のヘアルフデネという部族名も別に存在する (*Beowulf* 1.1069)。『ベーオウルフ』には、フネフはその部族名のヘアルフデネに属していたと述べられているが、フネフがフローガールの父親のヘアルフデネに仕えていたとは述べられていない。しかしチャドウィックの述べるように、時代からして、実際にフネフの仕えていたのは、フローズガールの父親のヘアルフデネであったと思われる。

⁵ クレーバーは、wrecca は、exile, adventurer, hero 等の意味があるとし、その部

分の wrecca を exile ではなく、hero としている (*Beowulf* 420)。

⁶ ギルヴァンは『ベオウルフ』の成立時期を、これまでのどの説よりも早く 7 世紀とした (Girvan, R., *Beowulf and the Seventh Century*, 1935; 2nd ed., Methuen, London, 1971)。レンはチェインバーズと同じように定説の 8 世紀前半を踏襲していると思われるが、「フィン王の挿話」の Hengest についてはギルヴァンの説を支持している。つまり『ベオウルフ』の成立時期の議論と「フィン王の挿話」の Hengest は別個に論じられ得るという考え方であろう。しかし私見では『ベオウルフ』の成立時期と「フィン王の挿話」の Hengest とは深い関係があると思われる。註 2) の拙稿等で触れたことがあり、本稿でも示唆は試みたが、その問題については、あらためて論じたいと思う。

⁷ Ingvacones は、Ingaevones とともに記される、タキトゥス、大プリニウス、ストラボン等に言及されている北海ゲルマン人の諸部族およびその国家である。Cf. Tacitus, 2.

引証資料

- Beda (Bede), *Venerabilis Baedae Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum*, ed., Ch. Plummer, Oxford, 1956.
- Beowulf. Beowulf and the Fight at Finnsburg*, ed. Fr. Klaeber, 3rd ed., D. C. Heath and Company, Lexington, Massachusetts, 1950.
- Chadwick, H. M., *The Origin of the English Nation*, Cambridge University Press, 1907.
- Chambers, R. W., *Beowulf—an Introduction to the Study of the Poem*, edited and supplemented by C. L. Wrenn, 3rd ed., Cambridge University Press, 1959.
- Nennius, *Historia Brittonum cum Additamentis Nenni*, ed. Theodor Mommsen, in M. G. H., A. A., Berlin, 1898.
- Niles, J. D., *Beowulf—The Poem and Its Tradition*, Harvard University Press, 1983.
- Tacitus (Publius Cornelius Tacitus). *Cornelii Taciti de origine et situ Germanorum*, ed. J. G. C. Anderson, Clarendon Press, Oxford, 1938.
- The Old English Version of Bede's Ecclesiastical History of the English People*, ed. Thomas Miller, E. E. T. S., vol. 95-96, 1890.
- Tolkien, J. R. R., *Finn and Hengest*, ed. A. Bliss, Harper Collins Publishers, 2006.
- Widsith. The Exeter Book*, ed. Krapp and Dobbie, Columbia University Press, 1936.

Synopsis

Hengest in *Beowulf*

IWAYA Michio

In *Beowulf* we can find several important digressions, in which is included so called the Finn Episode. Finn was the king of Frisia, which was one of the Germanic kingdoms in the Middle Ages. In that Episode, Hnæf, who was Finn's brother-in-law and belonged to the Danish dynasty, visited Finn's castle and during his stay there broke out a war between the Frisians and the Danes. The Jutes, who later migrated to Britain with the Angles and Saxons, were on the Frisians' side and in the beginning of the Episode had been suggested the Jutes' treachery toward the Danes. The leader of the Danish army was called Hengest. Although Hengest and his men fought bravely, Hnæf and his son were slayed and the war resulted in their defeat. After the war Hengest waited for the chance and finally revenged his king.

In the Finn's Episode Hengest was the leader of the Danes and fought with the Frisians and the Jutes. On the other hand, we find the name Hengist in Venerable Bede's *Ecclesiastical History of of the English People*. According to Bede Hengist was one of the earliest settlers in England and was the leader of the Jutes. Hengist was changed to Hengest in the Old English translation of Bede by Alfred the Great. The name Hengest is thought to be very rare in Old English. Is it then an incidental occurrence that the two names coexisted in both *Beowulf* and Bede? Or do they signify one and the same person? In the latter case, we are to face the next question: why does Hengest who in *Beowulf* belonged to the Danes and fought with the Jutes emerges as the leader of the Jutes in Bede? This paper aims to solve the question. It also tries to seek for thereason why *Beowulf*, which is the story of the Danish world, was written in Anglo-Saxon England.